

令和 7 年 古代出雲文化シンポジウム「島根の戦国時代と城」基調講演

陣城からみる戦国時代の戦いと城

滋賀県立大学名誉教授 中井 均

◆はじめに

- ・富田城 ⇒ 戦国時代の出雲の府【月山の名称を冠する】
- ・明徳 2 年(1391)の明徳の乱後に出雲守護となった京極氏 ⇒ 守護代を派遣して富田城を守らせる【応仁～文明年間(1467～87)に守護代尼子清貞、経久が本拠とする】
- ・月山(富田城本丸)に鎮座する勝日高守神社 ⇒ 『出雲国風土記神名帳』の加豆比乃高守社【聖地に築かれた城】
聖地に築城 ⇒ 守護・戦国大名権力が聖地に城を築くことによって、聖地を守護していることを国人領主や領民に知らしめ、守護・戦国大名権力を認めさせた
※近江守護六角氏の居城である観音寺城は西国観音靈場の観音正寺に構えられている

◆大内氏と毛利氏による富田城攻め

- ・尼子氏と大内氏の対立 ⇒ 天文 11 年(1542)には大内義隆の軍勢が出雲に進軍【天文 12 年(1543)には富田城が攻められる】
- ・尼子氏と毛利氏の対立 ⇒ 永禄 8 年(1565)には毛利元就が富田城を攻める【永禄 9 年(1566)に降伏開城し、尼子義久、倫久、秀久は安芸へ送られる】

◆富田城の構造と富田城攻めの陣所

- ・開口する谷を城下とする構造(I 字型)と閉塞する谷を城下とする構造(T 字型)
I 字型 ⇒ 富田城、一乗谷城【前面に川が流れるが、その対岸の山も防衛圏としなければならない】
T 字型 ⇒ 小谷城、杣山城【谷筋に城下を構え、その奥に聳える山頂に山城を構える】
- ・天文 12 年の大内義隆による富田城攻め ⇒ 「御屋形様けうらき(京羅木)へ御山陣にて候つ」、「陶殿(陶隆房)ハ経塚(経塚山)へ御陣取候」(『二宮佐渡覚書』吉川家文書)
- ・永禄 8～9 年の毛利元就による富田城攻め ⇒ 「輝元様・元長様御陣初にて、被成御出候、ほしかミ山(星上山)を御陣にて、八幡・淨安寺山・石原・うへ田の山まで御陣取候」(『森脇飛彈覚書』毛利家文庫)
- ・まさに富田城正面の山稜に攻城側が陣を構えることとなった

◆陣城の構造

- ・京羅木山 ⇒ 大内氏、毛利氏の富田城攻めの本陣【富田城と飯梨川を挟んだ東北に位置す

る】

京羅木山(472.9m)からは富田城(月山：183.7m)を眼下に見下ろすことができる

- ・京羅木山の陣 ⇒ 明確な城郭構造は認められない【極めて臨時的な陣】

富田城よりの眺望として重要な山であり本陣が置かれた

星上山 ⇒ 毛利軍の本陣は京羅木山より一歩下がった位置に選地【山岳寺院星上寺の存在】

- ・京羅木山南尾根に配された陣 ⇒ 不明瞭な削平段が続く【極めて臨時的な陣所】

※防御施設は構えられず陣城ではない【小屋掛けの陣所として評価すべき】

- ・富田城と向かい合う陣 ⇒ 宗松寺裏山城跡群、大成山城跡群、亀井ヶ成誓願寺裏城跡群、石原城跡【明確な城郭遺構は認められず、極めて臨時的な陣所】

- ・勝山城跡 ⇒ 京羅木山南尾根の陣の東端に築かれた陣城【宿営地としての陣ではなく明確な防御施設を構えた山城】

東側斜面から南側斜面に設けられた畝状豎堀群 ⇒ 槍溝【戦国時代後半の高度な防御施設】

※天文年間(1532～1555)～永禄年間(1558～1570)の特徴的な防御施設【まさに永禄8～9年の毛利軍による富田城攻めの時代に合致】

さらに折(おれ)の設けられた土塁、「人柵」と呼ばれる柵形虎口 ⇒ やはり戦国時代後半の高度な防御施設【京羅木山や南尾根の陣とは好対照】

さらに石垣や礎石の存在 ⇒ 陣城としては異質な施設の存在を示唆【恒久築城】

その可能性

1.元来尼子氏の城であった ⇒ 尼子氏の家臣田中三良左衛門が城主であったと伝えられる【富田城を眼下に見下ろせる位置は富田城防御として押さえておかねばならない】

※但し、現存する遺構は富田城攻めの際に毛利軍によって改修されたものと見られる

2.毛利氏による陣の防御として築かれた ⇒ 東側と南側が防御正面【臨時的な陣城ではなく、富田城監視のために恒久的な城として築かれた】

- ・三郡山城跡(東出雲町(現松江市)、広瀬町(現安来市)、安来市の境に立地することに由来する仮称) ⇒ 京羅木山より北東に伸びる尾根頂部に築かれた陣城【上意東から廣瀬へ超える荒田越に隣接する】

南側斜面と北側斜面に設けられた畝状豎堀群 ⇒ 北側斜面から京羅木山を守るために構えられた【勝山城と同様の防御施設】

◆その後の富田城

- ・尼子氏開城後の富田城 ⇒ 廃城とはならない【毛利氏による出雲支配の核として機能】
城代として福原貞俊、口羽通良が入れ置かれる ⇒ さらに安芸国衆天野隆重が「城督」として入れ置かれる【以後は毛利元秋(毛利元就5男で富田元秋を名乗る)、毛利元康(毛利元就8男)が入れ置かれる】

※旧領主の城を廢せず、新たな領主が入ることにより支配者の交代を見せる

- ・天正 19 年(1591)の吉川広家の入城 ⇒ 豊臣秀吉により出雲 3 郡、伯耆 3 郡、安芸 1 郡、隱岐国 14 万石が与えられる 【富田城を居城とする】
土の城から石垣の城へと大改修がおこなわれる ⇒ 戦国時代の出雲の府である富田城を維持して改修【旧城を織豊系城郭に改修することにより豊臣大名の居城を誇示】
- ・米子城の築城 ⇒ 同年(天正 19 年)に伯耆国に米子城を築城して居城とする 【両城体制】
毛利氏の場合 ⇒ 吉田郡山城と広島城(天正 17 年)、小早川氏の場合 ⇒ 新高山城と三原城(天正 9-10 年)
海への進出 ⇒ 秀吉の朝鮮出兵に関わるものか？(土佐の場合は岡豊城から大高坂城(高知城)へ、そして浦戸城)
- ・富田城石垣の画期 ⇒ 天正 19 年段階と慶長 3 年(1598)と考えられるが・・・【米子城では天正 19 年の石垣と慶長 3 年頃の石垣と、慶長 5 年後の石垣が明確に残る】
富田城跡には天正 19 年まで遡る可能性のある石垣は認められない ⇒ 米子城の慶長 3 年頃の石垣に併行する石垣【天正 19 年には米子城を本城とし、慶長 3 年に両城を改修した結果】
- ・千畳平の縄張り ⇒ 出隅部で折れ曲がる構造の石墨線【織豊系城郭の縄張りを導入】
※岩国城の山麓居館部に酷似する縄張り

◆おわりに

- ・京羅木山の陣 ⇒ 攻城戦に用いられた陣城と陣所【従来は陣城と陣所を明確に分けられることはなかった】
陣城として築かれたもの ⇒ 勝山城、三郡山城【敵状堅堀群、樹形虎口】
陣所として築かれたもの ⇒ 京羅木山の南方尾根【階段状に削平された削平地のみ】
- ・富田城 ⇒ 一貫して出雲の拠点であり続けた【軍事的要衝であるばかりではなく、富田城を居城とする行為が重要であった】

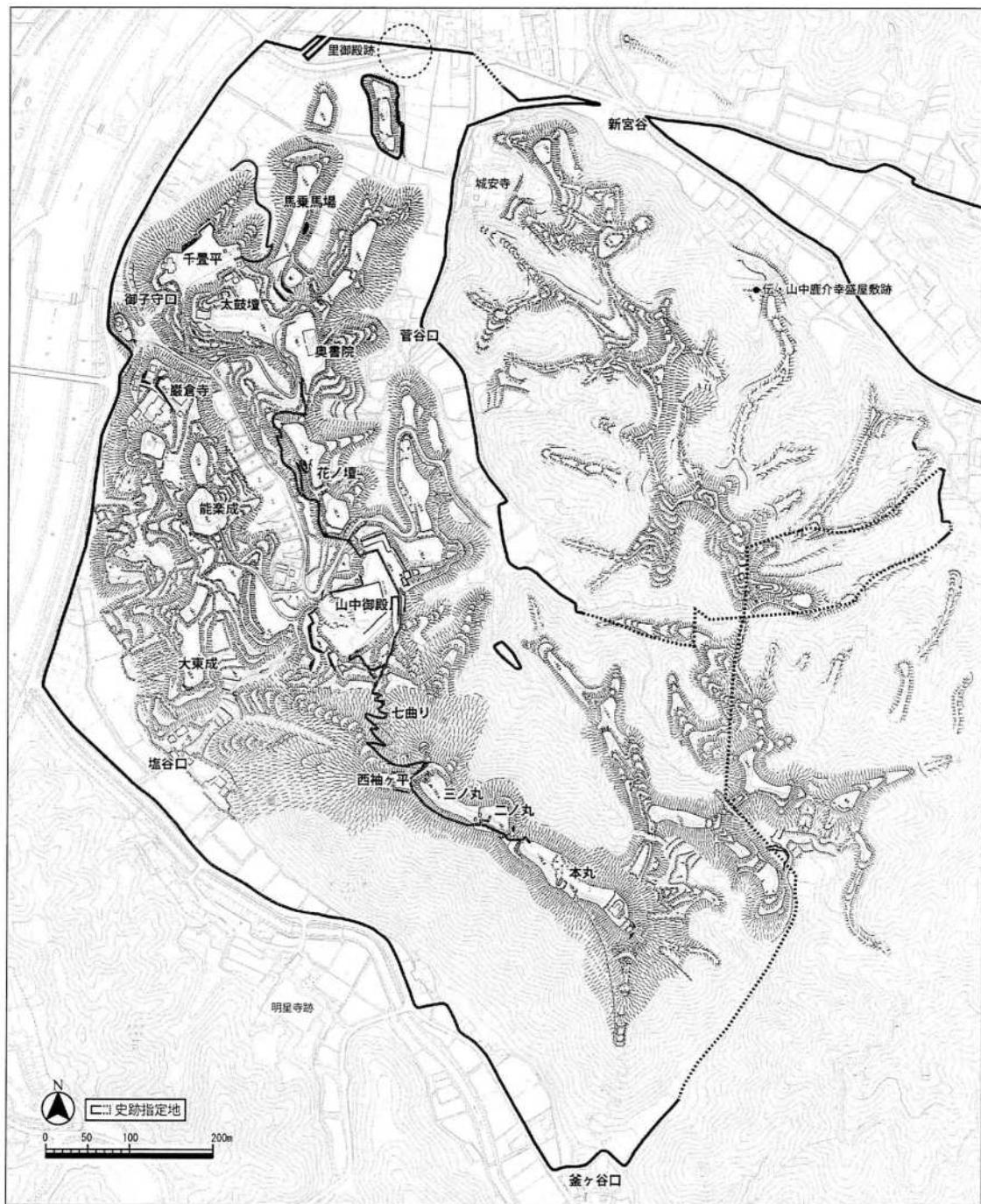


図1 富田城跡縄張り図(『史跡富田城跡石垣調査報告書』安来市 2015)



図2 京羅木山山頂から麓にかけての城跡位置図(『中世山陰の戦争と地域社会』2025)

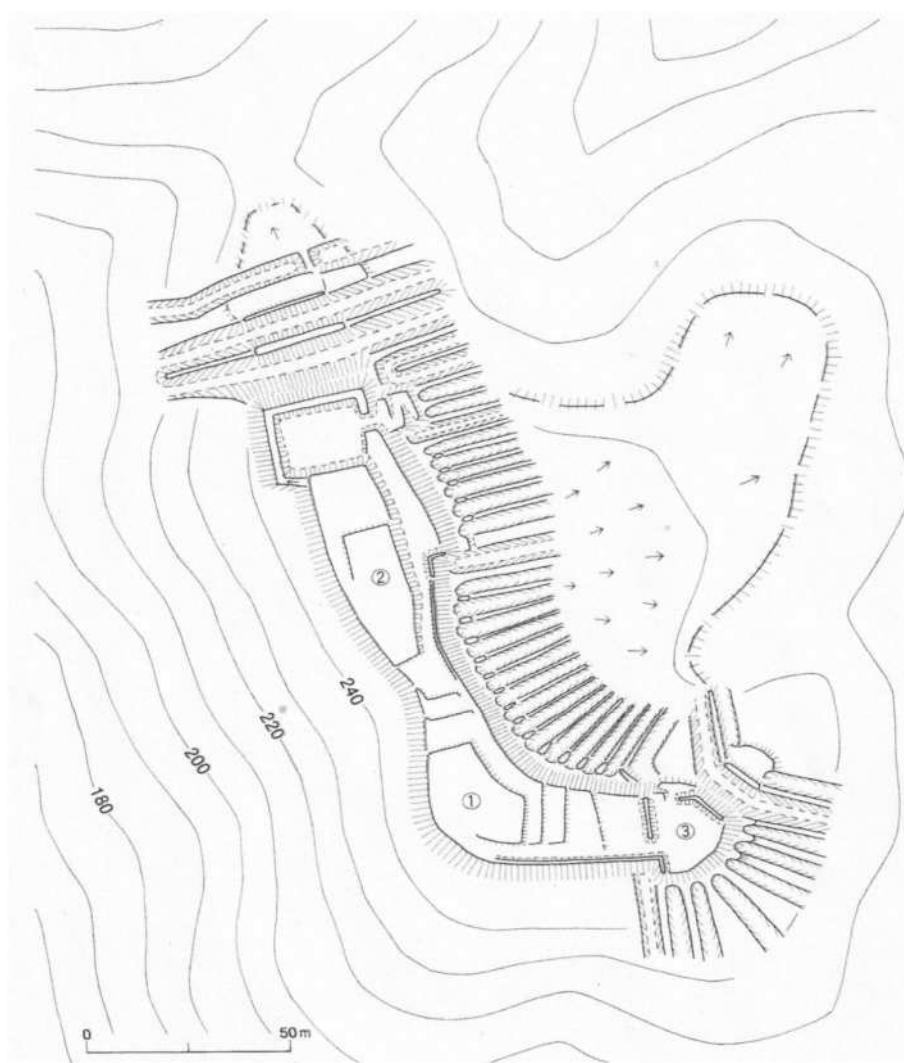


図3 勝山城跡略測図(『島根県中近世城館跡分布調査報告書 第2集』1998)

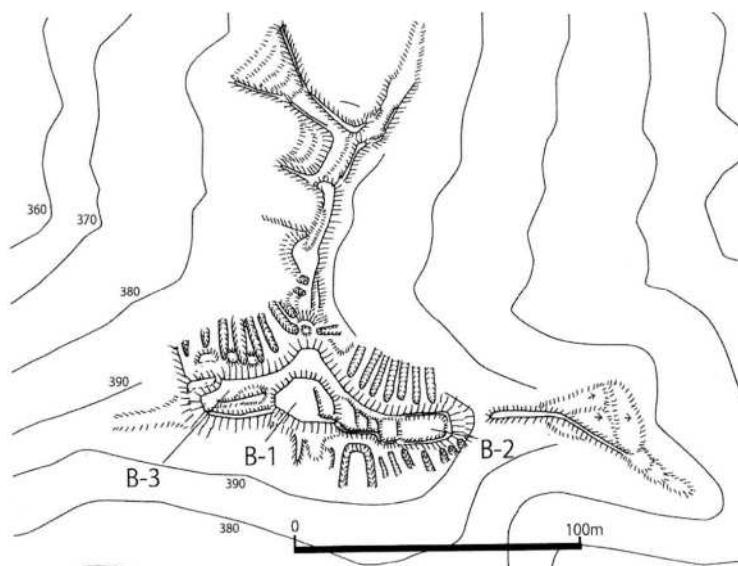


図4 三郡山城跡縄張図(高屋茂男氏作図『中世山陰の戦争と地域社会』2025)